日本と朝鮮半島における人びとの移動と記憶
――日朝韓に跨る親族のつながり

竹田　響

Ⅰ　はじめに

「北朝鮮第一次帰還者二百三十八世帯，九百七十五人は肉親，知人，関係団体約二千人に見送られ小雨ふる強風注意報下を予定通り十四日午後二時過ぎに新潟を出発，一路清津に向かった。（中略）ここに「自由圏から共産圏への民族の大移動」と世界の関心を集めた北朝鮮帰還も歴史的なスタートを切った。」（読売新聞　1959 年 12 月 14 日夕刊 1 面）

日本には朝鮮半島を植民地化していた歴史がある。第二次世界大戦の終戦時までに，少なくとも 210 万人の朝鮮人が朝鮮半島から日本の内地へと渡ってきた（藤原書店編集部編　2005）が，その内九割以上の人びとは，日本から地理的に近い朝鮮半島の南部に自身の出身地を持っていた（Ryang　1997）。日本が朝鮮半島を植民地化する前までは一つの国であった朝鮮半島は，1948 年に朝鮮半島の南部に大韓民国（Republic of Korea，以下 ROK と表記）が，北部に朝鮮民主主義人民共和国（Democratic People's Republic of Korea，以下 DPRK と表記）[1] がそれぞれ建国され，半島の南北が別々の国家として分断された。その後 1959 年から 1984 年にかけて，日本に暮らす在日朝鮮人とその配偶者などの家族を対象とした「帰国事業」が行われ，合わせて 93,340 人の人びとが日本から DPRK に移動した。この「帰国事業」を経て，親族の離散は日朝韓の 3 か国に広がることとなったのである。先に引用したものは，最初の帰国船が新潟港を出港した 1959 年 12 月 14 日の読売新聞の夕刊一面の記事の一部である。当時は「人道主義」の事業として，かつ資本主義国家である日本から社会主義国家である DPRK への人びとの移動として日本国内のメディアを通して大々的に取り上げられた。しかし，最後の帰国船[2] が出港してから 37 年が経過した今日，日本社会はその出来事をほぼ忘却に近い形で記憶の彼方へと追いやり，日本と朝鮮半島の南北双方に拡がっている親族関係について想像がなされることはほぼ無い（竹田　2021：172）。

本稿では，親族が日本と ROK，DPRK の 3 か国に跨って暮らしている人びとの中で，今日何らかの状態で国境を跨いだ親族と連絡を取り得る状態にある人びとが，これまでどのように親族間で連絡をとり合い，また今後とろうとしているのかを，親族の移動と記憶に焦点を当てて考察していく。

まず本章においては先行研究の検討を行った上で，調査の概要を述べる。続く第Ⅱ章では，国境を跨いで暮らしている親族との記憶について，事例を基に検討する。第Ⅲ章では，世代を跨いで伝えられる親族の記憶に着目し，親族間でこれまでどのように分かれて暮らす親族とのやりとりが記憶として継承され，また今後どのように継承され得るのか考察を行う。そして第

Ⅳ章では，本稿で用いた事例から全体的な考察を行い，結論を示す。

1　先行研究の検討

日朝韓に跨る親族のつながりについて考察するにあたって検討を加えたい 3 つの点について，以下で述べる。

(1) 日本に関する移民研究

日本を含む地域に関する移民研究の対象となってきたのは，「日本に来た人びと」と，「日本から海外に移動することとなった人びと」である。特に後者については「日本人」が対象とされることが常であったといっても過言ではない。[3] 日本と朝鮮半島における人びとの移動について扱う場合においても例外ではなく，朝鮮半島から日本の内地に渡ってきた在日朝鮮人はその議論の対象となるものの，日本から朝鮮半島への移動を考える際には「日本人」の移動，すなわち第二次世界大戦以前の日本内地から植民地となっていた朝鮮半島に移動した内地戸籍保有者が議論の中心となってきた（木村　1989，高　2001 ほか）。これらの議論に一石を投じることとなったのが，「引揚げ」に関する研究である。「引揚げ」に関する研究は 1990 年代以降に活発になってきたが，この中で，日本から朝鮮半島に「引揚げ」ることとなった在日朝鮮人についても扱われるようになった（今泉ほか　2016 ほか）。しかし，第二次世界大戦後の日本から朝鮮半島への人びとの移動については，戦争終結直後の朝鮮人の「引揚げ」が扱われるのみ[4] で，結果として，「帰国事業」による日本から朝鮮半島への人びとの移動については，移民に関する研究では検討の埒外に置かれてきた[5]。

(2)「帰国事業」に関する研究

「帰国事業」については，これまでの在日朝鮮人コミュニティに関する研究の一部でもその一端が触れられてきた。例えば原尻 (1988) は，自身がフィールドとしていた筑豊地区において，「帰国事業」によって DPRK に帰国した人びとがおり，帰国後は地区の中で在日本大韓民国民団（以下民団と表記）と在日本朝鮮人総聯合会（以下総聯と表記）に所属する人びとの構成比が変わったことを記述している（原尻　1988：106）。一方で，事業そのものに関する研究は，特に 2000 年代に入ってから行われるようになったといえよう。これらの研究では，「帰国事業」が実施されるに至った経緯やその背景，また事業に関する評価に関して検討がなされ，事業の開始に至るまでの国家間のやりとりや，当時の日本国内の様子，また事業の実施に関係していた各国の赤十字ならびに政府の思惑についての考察などが行われている（高橋・朴　2005，モーリス＝スズキ　2007 ほか）。しかし，事業と共に拡がった国境を跨いだ親族のつながりそのものに着目した研究は，2020 年代に入るまで執筆されていない[6]。

(3)「帝国」をめぐる人びとの移動や記憶に関する研究

日本は植民地を持つ「帝国」としてかつて存在していた（蘭　2008，白木沢　2017）が，石田（2000）は，第一次，ならびに第二次世界大戦における戦勝国であった旧宗主国とも異なる日本における集合的記憶の特徴として，「原爆や都市の空襲による被害者であるという意識の強

さが，加害の事実を忘却することに貢献している」点を挙げる（石田　2000：288）。また，山本（2006）によれば，「戦後日本社会」においては，「連合国により外生的に帝国－植民地を剥ぎ取られ，占領軍により外生的に平和と民主主義を注ぎ込まれた」ことによって，「戦争と戦前」の忘却に成功したという（山本　2006：iv）。事実，「日本史」にとっては周縁的な問題と見なされてきた植民地の問題が，「帝国」に関する研究として活発に取り上げられるようになったのは，1990年代の後半以降であった（松田・陳　2013：3-5）[7]。「帝国」をめぐる日本と朝鮮半島に関する研究においても，杉原（1998）が日本と朝鮮半島における人びとの「越境」をテーマに記述を試みた他，近年では李ほか（2019）が「帝国」の視点から戦中・戦後における日本と朝鮮半島の人びとの移動に着目した[8]。また，「帝国以後」の人の移動や記憶についても，近年研究がなされるようになってきている（蘭　2013ほか）ものの，これらの研究においても「帝国」日本における植民地支配をその移動の原因の一つとする日本からDPRKへの「帰国事業」については取り上げられず，結果として日朝韓の3か国に跨る人びとの移動と記憶については検討がなされないまま今日に至っている。

2　調査の概要

筆者は2017年6月より，日本国内の朝鮮学校を含む「在日同胞社会」において，親族がDPRKに「帰国」した経験を持つ人びとを対象にフィールドワークを行ってきた。ヒアリング調査時には，インフォーマントの同意を得た上で録音し，後にテープ起こしを実施した。本稿では，その内7世帯7名の事例を元に考察を行う。なお，インフォーマントの個人名は全て仮名である。

Ⅱ　国境を跨いだ親族の記憶

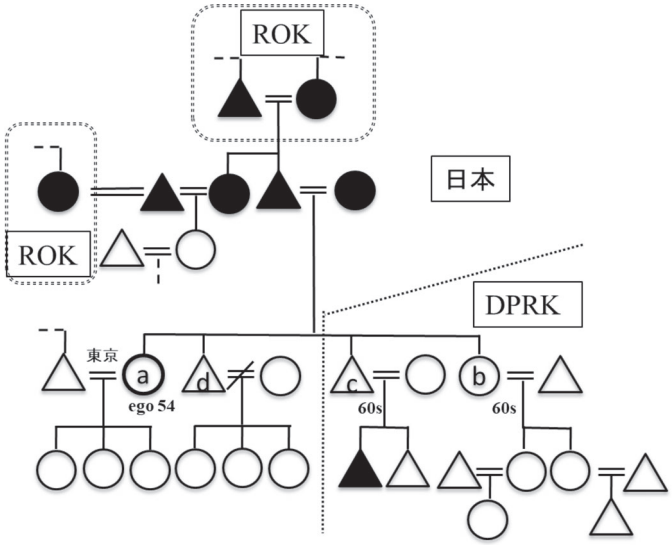
日本とROK，DPRKの3か国に親族が跨って暮らしている人びとは，どのように国境を跨いで暮らす親族と連絡をとってきたのだろうか。本章では，日本に暮らす親族がDPRKに暮らす親族とROKに暮らす親族と行ってきたやりとりについて，語りから得られた当事者の記憶を基に，考察を加えていく。なお，本章以降，本稿では親族系譜図を用いて各事例の説明を行う。そのため，まず初めに本稿で用いる親族系譜図について説明し，その後に事例の考察に入る。

本稿で用いる親族系譜図は，△が男性，○が女性を表し，黒塗りの▲および●は故人であることを示す。＝で結ばれている二人は婚姻関係を有しており，≠は当該の二人が離別していることを示している。また，△や○といった記号の右下にある数字は，当該人物の年齢を表している。本文で説明を加える個人にはアルファベットを付した。

1　DPRKに「帰国」した親族との記憶

黄（ファン）智慧（ジヘ）さん（仮名，以下智慧さんと表記，図1：○のa）は在日朝鮮人2世で，1965年に済州島の出身である両親の元に，四人兄妹の三番目として生まれた。兄妹の内，7歳上の姉（図1：○のb）と5歳上の兄（図1：△のc）は1974年に帰国船でDPRKに「帰国」し，智慧さんの家族と弟（図1：△のd）一家が日本で暮らしている。まず初めに取り上げるのは，兄妹との日

本での離別と，DPRK での再会の事例である。



＜図 1　2019 年時点の黄智慧さんの親族系譜図＞

智慧さんには，姉と兄の帰国に合わせて，家族と共に新潟港まで見送りに行った記憶がある。

【事例 1】新潟港で DPRK に「帰国」する兄を見送る（1974 年の出来事）

黄智慧「私は小学校 3 年生の時だから，よく覚えてますよ。すーっごい人だったもん，その新潟のホテル？それがキグ（帰国）する人たちのホテルと，見送る家族のホテルが別なんですよ[9]。（中略）で次の日に新潟の港に行って，見送ったんですよね。で私と，オッパ（兄）がつながってるテープが，最後まで切れないで残ったんです。それはなんでかっていうと，最初私は泣いてたんだけど，オッパが上で，泣くなー！って言って。怒ったわけよ。そう言われたから，ばかたれとかって言われたくないから，一生懸命絡まってたテープを，こうやって，ほぐして，ほどいてたの。そしたら，最後に船がバーッて離れていくときに，ずーっと切れないで 1 本だけスーって残ってたの。（中略）私が子どもの頃は，あのー，向こう（DPRK に帰国した姉と兄）も大学生だったってのもあって，定期的に手紙のやりとりがありました。（中略）昔は書いてもなかなか着かないわけ。どこ行ってるのか分からないけど，なかなか着かない。」

筆者　「送ったはずなのに，みたいな。」

黄智慧「送ったはずなのに行ってない，ってのもあるし，あのー，向こうから送ってきたのに届いてない，ってのも，時々そういうのもあったのかもしれない。」

〔2019 年 10 月 1 日 東京都内にてヒアリング〕

当時小学 3 年生だった智慧さんは，DPRK に「帰国」する姉と兄の見送りのため，家族と共に新潟港まで見送りに行った。智慧さんの場合は，姉と兄と別れる寂しさが，帰国船の出航時

に最後まで切れずに兄とつながっていた一本のテープの記憶と共に残っている。DPRK に「帰国」した親族と直接会うことは叶わなかった一方で，国際郵便を用いて手紙のやりとりを定期的に行っていた。しかし，日本から DPRK 宛に郵送する際も，また DPRK から日本宛に郵送する際も，送ってもなかなか届かないという事象が生じており，国境を跨いで暮らす親族からの手紙を待つ日々もあったという。

「帰国事業」を通した親族との離別の記憶は，1959 年～ 84 年までのいずれかの時期の体験として，今日まで親族の間に残っている。そして親族の中では，日本の中のどこかで見送った，ないしは見送られた記憶と共に，今も当人が思い出せる記憶として保持され続けている[10)]。

手紙のやりとりをしていた一方で，智慧さんが実際に姉と兄に再会したのは 8 年後，1982 年になってからである。新潟港から船に乗って初めて DPRK を訪問した智慧さんは，「帰国」した姉と兄に平壌で 8 年ぶりの再会を果たす。

【事例 2】意外にもあっさりとした再会（1982 年の出来事）

筆者　「（「帰国」した兄妹と）初めて会うまではちょっと時間は空いてたんですか。」

黄智慧「えっとね，（私が）小学校 3 年生で（姉たちが）行って，高校 2 年生の時に，生徒会の，役員の訪問団で，会って。8 年ぶりくらい。8 年越しの再会でさ，もうなんか，何年ぶりにオッパ（兄）とオンニ（姉）に会うなんて私大丈夫かしらって思ってたのね。（中略）それで，平壌で会ったら嬉しいじゃない。もう涙の再会かなって思ったらね，あっさりしてて，オンニも，（私が）抱きついたら，恥ずかしいからやめときーって，集合するから行きやーって。っていう感じで，あっさりしてた，っていうのを覚えてる。でもう，久しぶりに会ったんだけど，全然なんか，昨日まで一緒にいたみたいな感じで。だから，間もうんと空いてたけど，それでも一瞬で縮まる。」

〔2019 年 10 月 1 日 東京都内にてヒアリング〕

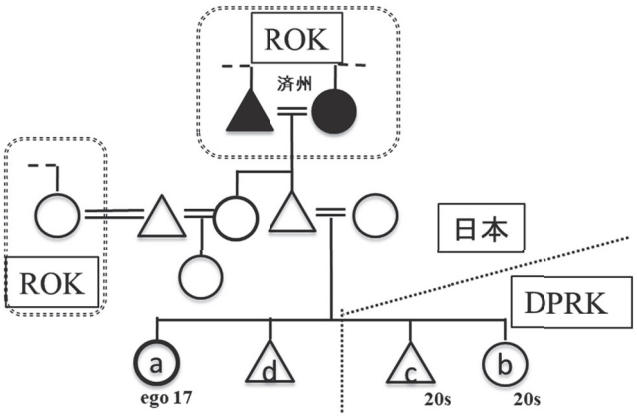


図 2　1982 年当時の黄智慧さんの親族系譜図

1988 年以降，朝鮮学校に通う高校生は，高校 3 年生になると「祖国訪問」として原則全員が平壌を訪問できるようになるが，それ以前は代表に選ばれた生徒のみが訪問できることになっ

ていた。智慧さんが高校生の時は，まだ全員が渡航できる段階になっていなかったが，高校の生徒会に相当する組織の役員として訪問する機会を得た。

智慧さんを乗せた船はDPRKの元山港に着岸した。兄妹との離別の際，新潟港で泣くのを必死で堪えながら見送った記憶がある智慧さんは，いつどこで再会の瞬間がくるのか，その時をそわそわしながら待っていた。実際には平壌に移動してから実の姉と兄に再会することとなったが，智慧さんにとっては，想像していたよりも「あっさり」したものであった。離別していた時間は，智慧さんにとっては長いように感じられた一方で，実際に会うと，それまでもずっと一緒にいたように感じるほど，元々あった兄妹間の関係性のまま話すことができたという。智慧さんにとっては嬉しい記憶として，平壌での姉と兄との再会が胸に刻まれている。

智慧さんをはじめとする日本に暮らす親族と，「帰国事業」を通してDPRKに暮らす親族とのやりとりは今日まで続いており，近年は日本に暮らす親族がDPRKを訪問したタイミングで直接会って，連絡をとり合っている。

【事例 3】誰かが会いに行く（2010 年代）

黄智慧「今は，誰かが必ずね，1 年に 1 回か 2 年に 1 回は誰かが（日本から DPRK に）行ってるの。親戚の。（中略）行くときは，（その時に渡航しない他の親族の）手紙も託して。（中略）郵送だとやっぱりね，時間がね。昔は，結構かかる。最近は早ければ 1 週間，もっと早ければ 4 日くらいで，着く時もあります。ほんと少しだけどね。早い時もあるのよ。そんな早い時もある。遅い時は 1 か月くらいかかるけど。（昔は行っていたものの）手紙のやりとりはね，今の日本と一緒で，そんな手紙なんか送らないじゃん。そんな感じ。」

〔2019 年 10 月 1 日 東京都内にてヒアリング〕

かつては国際郵便を用いて手紙のやりとりを行っていたが，郵送ではいつ届くか分からない，という問題があった。そこで智慧さんの親族の場合は，近年[11]は日本から 1 年に 1 度，ないし 2 年に 1 度親族がDPRKを訪問し，直接会った時に手紙やモノを渡す，という手段をとるようになっていた。

ここまで，智慧さんの親族を事例に，日本に暮らす親族がDPRKに暮らす親族との間で保持されている記憶についてみてきた。DPRKに「帰国」した親族と日本に暮らす親族は，日本での離別の記憶を各々が保持しながらも，離別後，すぐに直接会うことはできず，1970 年代～ 80 年代にかけて，次第に再会できるようになっていた。また親族と再会する場合も，DPRKに暮らしている親族が日本を訪れることは叶わなかった。そこで，朝鮮学校や組織を通して行われていた代表団や訪問団などの訪問の機会を用いて，日本からDPRKに会いに行くという形で，数年ぶりの親族の再会がDPRKで行われていた。また，その後も日本とDPRKの間には国交が結ばれていないものの，親族間での連絡は継続されており，日本からDPRKを訪問する形で，定期的に親族が対面する場が構築されていた。

次節ではROKに暮らす親族との記憶についてとり上げる。

2　ROK に暮らす親族との記憶

梁（リャンチン） 鎮世（セ）さん（仮名，以下鎮世さんと表記，図 2：△の a）は，1957 年生まれの在日コリアン 3 世である。鎮世さんの父方の親族の内，叔父（図 2：△の B）と叔母（図 2：○の C）の二人は初期の帰国船で，また従兄弟（図 2：△の b）が 1976 年の帰国船で，また伯母（図 2：○の D）が 2003 年に DPRK に「帰国」している一方，鎮世さんの母方の親族の内，2 人の叔母（図 2：●の F と G）とその家族は ROK の釜山に暮らしていた。鎮世さん一家は山口県で商いを営みながら暮らしていたが，ROK に暮らす母方の親族とは，鎮世さんが幼い時から定期的なやりとりがあった。鎮世さんには，両親の国籍が異なっていた記憶が今でも残っている。

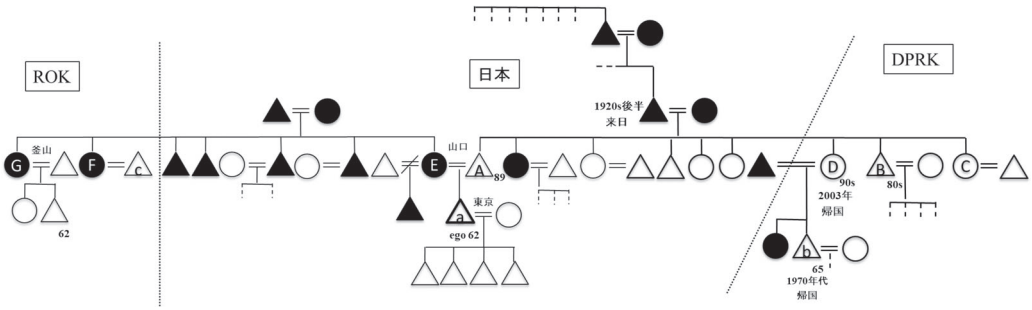


図 3　2019 年時点での梁鎮世さんの親族系譜図

【事例 4】親族に会うために国籍を変える（1970 年代）

梁鎮世「韓国の親戚は，しょっちゅう家に，きてました。なぜかっていうと，近いんで。山口で商売やってましたから，あのー，船で行ったり来たりできるんですね。母も，しょっちゅう，（南に）行ってました。だから，その，父と母で，国籍が，違ってた。父はだから，北に行けるようにっていうので，朝鮮籍のままにしたし，母は早くから韓国籍でパスポートを取った。（中略）韓国にいる母の姉の旦那さんには（日本で）会ったことあるんですけど，その旦那さんも，やっぱり日本に来て，あの，日本で治療してね。当時まだうちは商売やってて，まあ経済的余裕があったんですよ，治療費を出せるような。だから呼んで，まああのー，保険治療効かないから高いんですけど，治療させて，帰ったっていう。そういうのはありましたね。」

（中略）

筆者　「その（ROK に暮らす）お母様の親族っていうのは，その当時のやりとりは電話とかですか。それとも手紙 … ？」

梁鎮世「国際電話ですね。」

〔2019 年 9 月 19 日 東京都内にてヒアリング〕

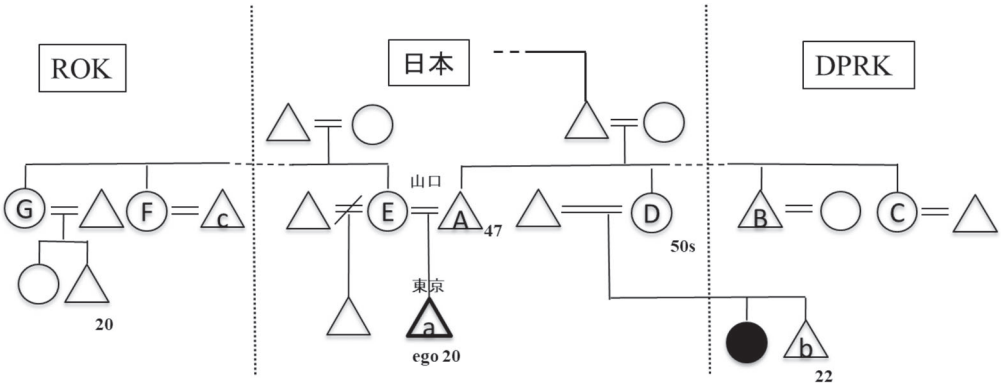


図４　1977年当時の梁鎮世さんの親族系譜図

鎮世さんの場合は，母親（図４：○のA）にとって姉妹にあたる親族（図４：○のFとG，ならびにその家族）がROKに暮らしていたことから，国際電話を用いた定期的なやりとりが行われていた。また，1970年からは下関とROKの釜山の間に「関釜フェリー」と呼ばれる船が日韓定期航路として就航，隔日運航がなされるようになり[12]，フェリーを用いて日本とROKを行き来する親族も多かった。このフェリーが就航したことから，鎮世さんの母親の姉の夫（図４：△のc）が治療のためにROKから日本に来たり，また鎮世さんの母親も日本からROKに渡航したりするなど，親族同士の行き来が定期的に行われていた。一方で，朝鮮籍のままにしていた場合は，ROK政府から共産主義者と見なされ，ROKへの入国が拒否されるケースがあった。また，仮にROKに渡航できた場合も，ROK国内で逮捕される可能性があった。そのため，鎮世さんの母親は，ROKへの渡航が容易になる韓国籍に国籍を変更したが，反対に鎮世さんの父親は，DPRKに「帰国」した親族に会うために，DPRKへの渡航が容易な朝鮮籍のままにしていた。鎮世さんは朝鮮籍のままであったため，ROKに渡航することはできなかったが，ROKに暮らす親族が日本に来た際に，鎮世さんの実家でROKに暮らす親族と対面していた。

1980年代に入っても，ROKでは反共産主義思想が強く存在しており，元々親族が朝鮮半島の南部出身であったとしても，DPRKにいる親族と連絡がとれる状態にあるなどとROK当局に見なされた場合，監視の対象となることも少なくなかった[13]。これは，ROK国内に留まらず，日本国内でROKに暮らす親族と会う際にも発生した。次の事例は，ROKに暮らす親族が日本に暮らす親族を訪問した際に，日本国内でROK当局に尾行されたというケースである。

朴民和（パクミンファ）さん（仮名，以下民和さんと表記，図５：○のa）は，朝鮮籍を保持している在日朝鮮人２世である。４人兄妹の末っ子として1950年に東京で生まれた。民和さんの両親（図５：▲のAと●のB）は元々朝鮮半島南部の出身で，日本では生前，総聯の活動に従事していた。民和さんの兄妹の内，民和さん以外の三人（図５：▲のdと○のb，c）は，1960年代初頭の帰国船でDPRKに「帰国」し，現在までDPRK国内で生活を送っているが，他方，両親の兄妹（図５：▲のC，D，F，Gと○のE）とその家族は今日までROKに居住している。その内母親の兄の子ども（民和さんからみた従兄弟，図５：△のf）は1980年代に日本に来日，民和さんの両親に連絡をとり，東京で会うこととなった。

【事例 5】ROK の情報機関（KCIA）による尾行（1980 年代）

朴民和「（ROK に暮らす母方の）一番下のオッパ（兄）は，軍事政権[14] の時に，ソウルテハッキョ（ソウル大学）にいたんですけど，（中略）学生の代表団で日本に来た時に，うちのアボジ（父）とオモニ（母）に会うんですよ。そこを KCIA は全部ついているんです。で，アボジとオモニにしたら，この子にもし，何かあったら大変だっていうので，会わないようにって言ったんだけど，そんなことはないです，自分が会いたい，会って下さいっていうことで，秋葉原のどっかで指定して会ったらしいんですけど，その時にオモニが，あの，12 月に来たので，オーバーと，スーツを買ってあげるわけですよね。でそこで話しながら，そのオッパは，チャグンアボジ（叔父：民和さんの父親の意）とチャグンオモニ（叔母:民和さんの母親の意）との，出会いっていうか，あの時出会ったのが，自分の人生観を変えたってずっと話をしていて。」

〔2018 年 11 月 12 日 東京都内にてヒアリング〕

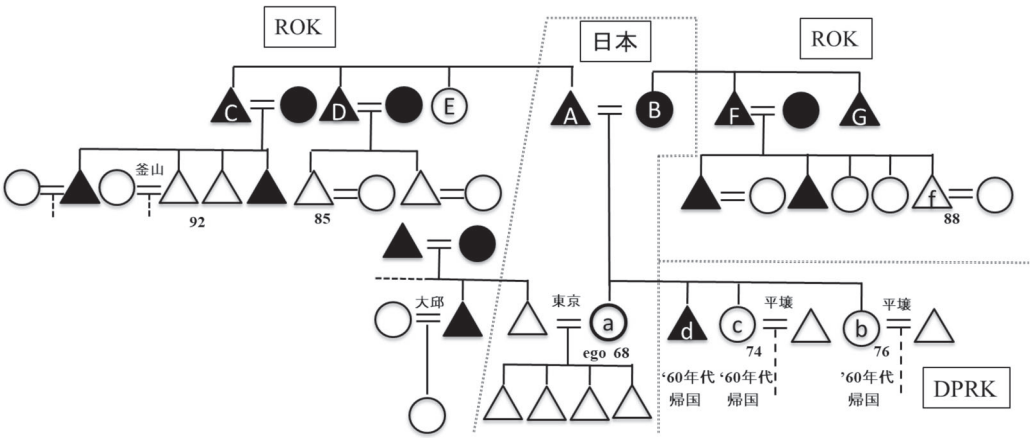


図 5　2018 年時点での朴民和さんの親族系譜図

ROK に暮らす親族と会うということは，特に朝鮮籍を保持していた在日朝鮮人にとっては，簡単なことではなかった。ROK から見た DPRK は，共産主義であり，かつ「敵国」として存在しており，ROK 国民は，国家保安法によって，今日まで DPRK と関係する「共産主義者」とは会ってはならないという制限が課せられている。DPRK に親族がいる在日コリアンも同じく「共産主義者」の扱いとされ，日本国内においても ROK の情報機関からの監視の対象となっていた[15]。民和さんの親族の場合も，両親と ROK に暮らす民和さんの従兄弟が東京都内で対面した際に，KCIA による尾行が行われていた。

また，事例 4 でも述べた通り，朝鮮籍を保持している人びとは，当時 ROK に渡航することはできなかった。民和さんの両親は朝鮮籍であるために，ROK に渡航できないばかりか，ROK から来日した親族にも KCIA の監視がつき，「共産主義者」との接触を警戒されていた。しかし，ROK に暮らす親族が望んだ際には日本国内で，当局の監視をくぐり抜ける形で親族同士が出会い，モノや情報の交換が行われていた。

一方，国籍による移動の制限によって ROK への渡航ができないことで，ROK に暮らす親族

と音信不通になってしまうこともあった。次にとり上げる親族は，ROKに暮らす親族と一度は連絡が取れなくなってしまったものの，再び親族間で連絡がとれるようになった親族の事例である。

呉勇成（オヨンソン）さん（以下勇成さんと表記，図６：△のａ）は1950年生まれの在日朝鮮人２世である。勇成さんの兄妹の内２人（図６:○のｂと▲のｃ）と母方の従兄弟（図６:△のｄ）がDPRKに「帰国」した一方，父親の兄妹（図６：●のB，Dと▲のC）とその家族は皆ROKに暮らしていた。勇成さんの家族は総聯に属していたため，ROKに渡航することは難しい状態にあったが，一方で勇成さんが小学生のころにはROKの親族宛に手紙を送るなどしていた。しかし，ROKに兄妹がいる父親（図６:▲のA）が1972年に亡くなったことで，ROKの親族とは次第に疎遠になった。ある時族譜（チョッポ）[16]に書いてあった住所に手紙を送ると，ROKの親族が転居したことが判明，音信不通の状態が続いていた。1990年代後半に勇成さんはこれまでできていなかった戸籍の整理をしようと決意，戸籍の整理を通して故郷に暮らす父親の弟（図６：▲のB）の子ども世代（従兄弟）の居場所が分かり，2005年から再び連絡がとり合えるようになった。ROKに暮らす親族との連絡を容易にとるために，勇成さんは国籍を朝鮮籍から韓国籍に変更することを決意する。韓国籍を取得しROKへの訪問が容易になった勇成さんは，今ではROKに暮らす親族とお正月と秋夕（チュソク）[17]の時に贈り物の交換を行っている。

【事例６】親族と再び連絡を取る（2010年代）

呉勇成「最近はお中元みたいな感じで送りあってるのね。向こうからはさ，お菓子とか海苔とかを送ってきてくれて，こっちからもお菓子とちょっとした食べ物を送ってる。（中略）まあせっかくまたつながれたし，関係性は大切にしていきたいよね。それはお互いに思ってる。」

〔2019年11月16日 神奈川県内にてヒアリング〕

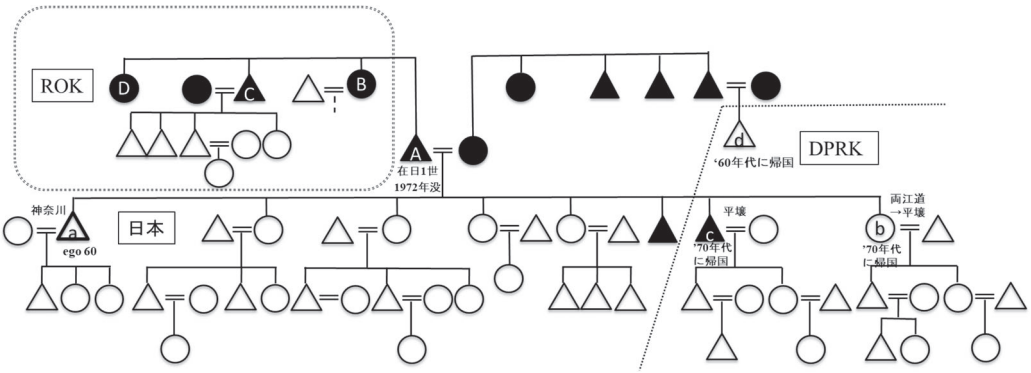


図６　2019年現在の呉勇成さんの親族系譜図

勇成さんの場合は，ROKに暮らす親族の住所変更によって一度は音信不通になってしまうものの，1990年代後半にROKの戸籍を整理する過程で再びつながり，連絡がとれるようになった。ここに大きく関わっていたのが，ROKへの渡航の可否である。勇成さんは総聯に属しており，

またDPRKにも親族がいたため，勇成さんもDPRKに会いに行けるように長年朝鮮籍を保持していた。そのためROKに渡航することはできない状態にあったが，金大中政権時に行われた「太陽政策」によって，朝鮮籍保持者もROKへの「故郷訪問」ができるようになった[18]。しかし，朝鮮籍を保持していた場合，ROKが右派政権になると再び渡航ができなくなる可能性があった。そこで勇成さんは，戸籍の整理と共に国籍を朝鮮籍から韓国籍に変更し，ROKに暮らす親族に実際に会えるようにしていた[19]。再び連絡がとれるようになってからは，日本とROKの親族でお互いにモノを贈り合うなど，双方の親族が連絡をとり合える体制を継続させる手段を採っていた。

ここまで，3世帯の事例を元に，日本に暮らす親族がROKに暮らす親族との間で保持している記憶について取り上げた。ROKに暮らす親族とは，電話や手紙でのやりとりが行われていた他，ROKから日本に親族が来る形で，日本国内で再会した記憶が親族間で保持されていた。中には日本からROKに暮らす親族を訪ねていた人もいるが，この場合，朝鮮籍のままではROKに入国することができなかったため，国籍を朝鮮籍から韓国籍に変更する必要があった。一方，当時のROKでは反共産主義の思想が強く存在していたことから，ROKに暮らす親族が日本を訪問して親族同士が対面する場合においても，ROKの情報機関から尾行される，といった経験をする場合があった。また，朝鮮籍を保持していたために，ROKに渡航できず，故郷に暮らす親族とも疎遠になるというケースも存在した。しかし，本稿で取り上げた事例では，何らかのきっかけで再び連絡がとれた際に，親を介さない形で親族関係を再構築する形で，親族関係が次世代に継承されていた。

本章では，日本と南北の朝鮮半島に親族が国境を跨ぐ形で暮らしている人びとがどのように親族間で連絡をとってきたのかを，当事者の記憶からみてきた。日本とROK，DPRKの3か国へと親族の離散が拡大した一つの要因として日本からDPRKへの「帰国事業」があるが，日本で見送った記憶や，親族に見送られた記憶は，日本に暮らす親族，ならびにDPRKに「帰国」した親族の双方が今日も当事者同士によって保持されていた。日本での離別後，すぐに親族間が再会することは叶わなかったものの，この間も日本とDPRKの親族間では手紙のやりとりなどが行われていた。また，親族によっては，今日においても連絡をとり合える関係を維持している人びともおり，その場合は，手紙のやりとりや，日本に暮らす親族がDPRKを訪問するなどの形で，親族間で直接連絡をとり合える関係が構築されていた。DPRKに「帰国」した親族がいた一方で，多くの在日朝鮮人の元々の故郷であった朝鮮半島南部で暮らしていた親族は，今もROKで生活を送っている。国籍によって移動できる範囲が異なる状況の中で，南北双方に暮らす親族のどちらとより会うか，といった指標を用いて，親族間で国籍の選択が戦略的に行われていた。国境を跨いで暮らす親族と距離が近い親の世代が亡くなることで，親族関係が疎遠になってしまう場合もあった。しかし，これまで行えていなかった戸籍の整理など，何らかのきっかけを通して親族が再び連絡をとり合えるようになる場合もあり，親族関係が次世代で再構築される事例も実際に生まれていた。

Ⅲ　世代を跨ぐ親族の記憶

本章では，親族から話を聞いたり，自らが伝達したりしながら世代を跨ぐ形で継承されていく親族間の記憶について，事例を元に考察を行う。

1　南北双方との親族関係

金柔那（キムユナ）さん（仮名，以下柔那さんと表記，図 7：○の a）は 1994 年生まれの在日朝鮮人 3 世である。2011 年に亡くなった柔那さんの父方の祖父（図 7：▲の A）は済州島の出身であり，民団に属していた。祖父の兄妹家族の一部は今も ROK の済州島に暮らしており，また祖父の 7 人の子どもの内 2 人（図 7：○の C，●の D）が DPRK に「帰国」している。祖父は民団に属していたために，DPRK には 2000 年になるまで渡航することができなかった。そのためそれまでは「帰国」した子どもと対面することはできずにいたが，その代わりに柔那さんの祖父は，朝鮮半島の南北に暮らす親族の双方に対して，日本から送金を行っていた。柔那さんは，この話を親族内で伝え聞いた記憶がある。

【事例 7：北にも南にも送金する（1990 年代）】

金柔那「（親族に）お金を送るじゃないですか，でも済州にすごい寄付は，してました。おじいちゃん。ハラボジ（祖父）はめちゃくちゃやってるし，日本にいた，人たちは済州島に寄付してたから。」

（中略）

筆者　「ハラボニム（おじいさま）は（中略）北にも南にも送ってたってこと？」

金柔那「そうそうそう。めっちゃ，笑えますよね，どういう関係だよって。（中略）でもハラボジからしたら（DPRK にいるのは）娘なわけじゃないですか。で，まあ，そのハラボジからしたら，自分の兄弟が，済州島にいて，それこそ発展も遅いし貧しい，から，送るし，みたいな。」

筆者　「アボジ（父）も送ってたの？ ハラボジ（祖父）？」

金柔那「ハラボジ，です。（中略）相当な額，を送ってたみたいです。（中略）南に送ってたのと，北は普通に親族がいるから。ずっと両方に送ってたみたいですね。完全に韓国籍だから，とか，朝鮮籍だから，とかじゃないんですよ。」

〔2019 年 9 月 23 日 千葉県内にてヒアリング〕

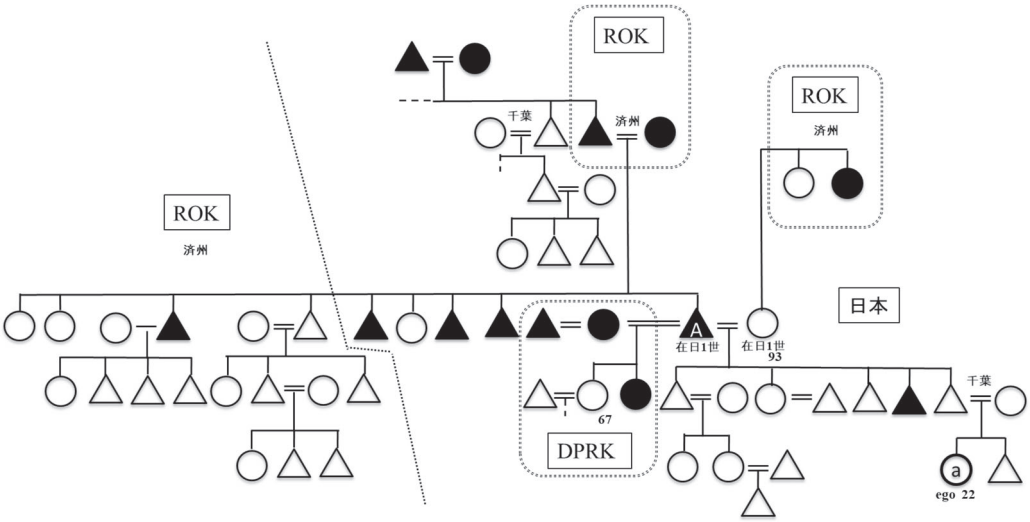


図７　2019 年時点での金柔那さんの親族系譜図

柔那さんの祖父は，在日朝鮮人１世として故郷の済州島から日本に渡ってきた。韓国籍を取得し，また民団に属していたことから，故郷である済州島との間は直接行き来をしていた。一方，「帰国」した兄妹が暮らす DPRK に渡航することは，ROK で南北融和政策がとられるようになった 2000 年まで渡航することができず，そのため日本から DPRK の親族に送金を行っていた。一方で祖父自身は済州島の出身であり，故郷に貢献したい，という思いから，済州島にも送金を行っていた。

在日朝鮮人は，1948 年に南北に分かれてしまった朝鮮半島における国家の内，DPRK と ROK のどちらの政府を支持するかによって，1950 年代以降，DPRK を支持する総聯と，ROK を支持する民団をはじめとする民族組織への所属を選択することとなった。これによって，親族内部でも，ある人は総聯に属しているものの，またある人は民団に属している，といった事象が生じるようになっていた。事例７においても，柔那さんの祖父は民団に属していた一方で，兄妹は DPRK への「帰国」を選択していた。ROK を支持する民団に属していたために DPRK への渡航を行うことはできなかったが，日本から送金を行うという形で，日本から ROK と DPRK へのお金のやりとりが同時に行われ，また南北どちらか，ではなくどちらにも親族がいる，という記憶が，口承を通して祖父から孫の世代に継承されていた。

一方，親族間で継承されるのは過去の記憶だけとは限らない。次節では，DPRK に帰国した親族内で日本語が継承されている事例をとり上げる。

2　言語の継承

周在盛（チュジェソン）さん（仮名，以下在盛さんと表記，図８：△の a）は，1952 年生まれの在日朝鮮人２世である。在盛さんは４人兄妹の３番目であるが，姉（図８：○の b）と兄（図８：▲の c）が 1970 年代の帰国船で DPRK に「帰国」した。在盛さんの母親（図８：○の A）は幼い時に朝鮮半島南部から日本内地に移動してきたが，日本の学校に通ったため，朝鮮語を話すことはでき

ない。近年，母親は基本的に毎年 DPRK を訪れ，DPRK に「帰国」した在盛さんの姉とその家族に会っているが，在盛さんの姉は，母親が孫ともコミュニケーションをとれるように，DPRK で生まれた自分の娘に家庭内で日本語を教えてきた。

【事例 8：日本語を使う DPRK の親族（2010 年代）】

周在盛「（帰国した）ヌナ（姉）はもう，日本語バンバンできるので，オモニ（母）との会話も（日本語で）。オモニはウリマル（朝鮮語），できないので。もうずっと日本学校ずーっと通って，通ってきたので。（中略）だからヌナはちゃんと，日本語でちゃんと。オモニとも対応して。で自分の娘たちにも日本語教えているので，ヌナは。ハルモニ（おばあちゃん）来たら日本語でちゃんと喋ろよって（笑）（中略）だからもう，オモニはもう，ウリナラ（DPRK）行ったら，天国，極楽の世界ですよ。娘たち，孫たちが皆女の子で，みんな「ハルモニー，ハルモニー」ってすごいんですよ。日本でそんなこと絶対しないですからね。そしたらもう，わーわーって，こうやってマッサージしてくれたり，何してくれたりって。だからもう，ウリナラ行くのがもう，楽しくてしょうがない。（笑）」

〔2020 年 6 月 22 日 東京都内にてヒアリング〕

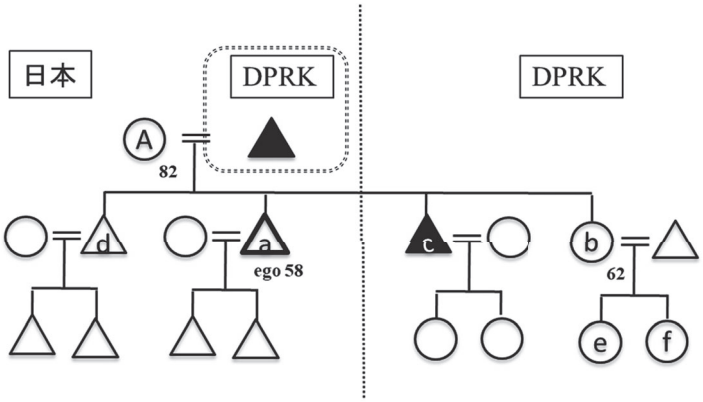


図 8　2020 年時点での周在盛さんの親族系譜図

「帰国事業」によって DPRK に移動した親族の中には日本で生まれ育った在日朝鮮人 2 世もおり，「帰国」した在盛さんの姉と兄にとっても，母語は日本語であった[20]。母親は朝鮮語が話せないことから，仮に孫世代が日本語を話せない場合，母親は孫世代とコミュニケーションをとることは難しくなる。そこで，在盛さんの姉は自身の子どもに家庭内で日本語を教え，母親との共通言語の継承をする決断をする。結果として姉の二人の娘は第二言語として日本語を話せるようになり，朝鮮語を話すことができない在日朝鮮人 1 世の母親が DPRK に渡航した際に，日本語で会話を行う，という手段が用いられていた。

国境を跨いで親族が移動することによって，世代が下がると共に，それまでの世代が第一言語として用いていた言語とは異なる言語を用いて生活を送るようになっていく。日本と朝鮮半島においては，元々朝鮮半島から日本内地に移動した際に，日本語の使用が強制され，朝鮮語を習得する機会がなくなってしまったことから，第二次世界大戦終結後，日本の各地に朝鮮学

校が建設され，日本国内で朝鮮語の習得が行われるようになった。一方，「帰国事業」によって，今度は日本で生まれた世代もDPRKに「帰国」することとなり，その結果，日本に暮らす親族と連絡を取り合えるようにするために，親族によってはDPRK国内で日本語の継承を行うようになっていた。

3　国境を跨いだ親族関係のこれから

在盛さんは，近年はコロナ禍以前まで毎年DPRKを訪れ，「帰国」した兄妹と再会し，国境を跨いで連絡を取れる体制を築いていた。一方，子どもたちの代に世代が下がった時に，国境を跨いだ親族関係が続くかどうかについては，懐疑的な思いがある。

【事例9：子どもの世代はもう会わなくなるのでは（2010年代）】

筆者　「（DPRKに暮らす）お孫さん，えっとご兄弟のお子さん，とは，まあ，今は普通に会ったりしていて，これからも，しばらくは会い続けますか…？」

周在盛「まあだから，そうですね，我々の世代まではそうですね。それ以下は，多分ない，なくなると思います。多分それはどこの家でもそんな感じじゃないんですかね。（中略）（DPRKに）親戚いない家っていうのはあんまりいない。（中略）でも，ウリナラ（DPRK）に行く時にも，いちいち申請しないと会わないので。うちらが申請しない限り，あっちは来れないので。だから，ほんと会わない人，いっぱいいますよ。やっぱり我々みたいに，完全に，兄弟だし，親子だし。これはもう当然それは会えるけれども，でもその下の代，その下まで行っちゃったらもう（会わないのでは）。」

〔2020年6月22日 東京都内にてヒアリング〕

在盛さんにとって，DPRKに暮らしている親族は自身の兄妹であり，血縁関係においても距離が近い。一方で，世代が下がれば下がるほど，血縁が遠くなり，それまでに会っていない親族とは次第に連絡をとらなくなっていくのではないか，というのが在盛さんの意見である。加えて，国境を跨いだ親族関係が希薄になり得る要因として，在盛さんは「事前の申請」が必要であることを挙げる。DPRKで暮らす親族と会うためには，ただふらっと渡航すればよいのではなく，渡航前に事前に訪問希望をDPRK当局側に申請する必要がある。申請をしない場合，DPRKに暮らす親族との再会は容易ではなく[21]，日本に暮らす親族が会おうとしない限り，DPRK国内で親族同士が直接会うという状況にはならない，という現状が，在盛さんの発言の背景にはあった。

一方で，次世代を担う若者の中には，国境を跨いだ親族関係を継続させていきたい，と考えている人もいる。申常綜（シンサンジョン）さん（仮名，以下常綜さんと表記，図9：△のa）は，1999年生まれの在日朝鮮人3世である。常綜さんの母方の祖母の兄妹（図9:△のC）とその家族がDPRKに「帰国」している。常綜さんはこれまで3度DPRKを訪問しているが，DPRKに暮らす親族の話を深く聞いたことはこれまでなかった。常綜さんは2020年にDPRKを訪れる予定があったが，その前年の2019年に，祖母（図9：○のB）から，次の訪朝時にDPRKに暮らす親族に会ってきてほしい，と依頼された。

【事例 10：祖母から親族訪問を頼まれる（2010 年代）】

筆者　「大体さ，（親族に会っているのは）俺達の親の代だよね。（国境を跨いで暮らす親族に）会いたいとは思う？」

申常綜「いや，でも，次行くなら ... いや，実は，去年，あ，だから今年，本当はウリナラ（DPRK）行く予定だったんだけど，ウェハルモニ（母方祖母）の，だから兄妹家族なのかな，いるから，会ってきてほしい，みたいな（話があって）。もうウェハルモニが，足も悪くて（中略）もうそういう，行ける，あれがないから，みたいな。だから常綜に，もし（DPRK に）行くってなったら，その時お願いするかもしれないっつって，話聞いてて，だからオモニ（母）も，じゃあ会ってくれば，みたいな話をしてて。（中略）やっぱ，向こうにも親戚いるって考えたら，すごいやっぱ会いたいな，と思って。会ってみたいなって。つながりは大切にしていきたい。でも今回のコロナでもうダメになっちゃったから，話飛んじゃった。（苦笑）」

〔2020 年 12 月 26 日 東京都内にてヒアリング〕

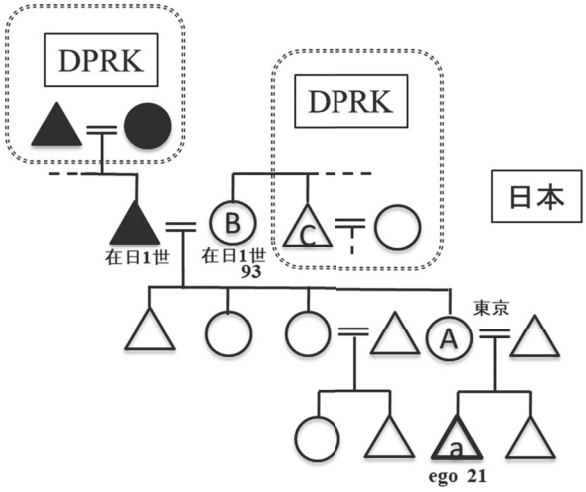


図 9　2020 年時点での申常綜さんの親族系譜図

常綜さんの祖母は 2020 年時点で 92 歳と高齢であり，飛行機を乗り継ぐ長時間の移動を行って DPRK を訪問することは現実的に難しい状態にあった。一方で，祖母にとっては自身の兄妹が DPRK に暮らしており，出来ることならば直接会って話がしたいと考えていた。そんな中で，孫にあたる常綜さんに，次に DPRK に渡航する際には会ってきてほしい，と依頼したのであった。

常綜さんはこれまで祖母から DPRK に暮らす親族について詳しく聞く機会は特段なかったが，祖母から話を受けたことで，DPRK に暮らす親族とも会ってみたい，と強く考えるようになった。その後，コロナ禍の影響によって，渡航予定であった 2020 年に渡航することはできなくなってしまったが，常綜さんは，次の渡航の機会に，親族訪問の申請を行い，DPRK に暮らす親族に会いたいという思いを抱いていた。

ここまで，国境を跨いだ親族関係の今後について，2 世代の事例をとり上げた。自身の兄妹が

DPRKに「帰国」している在日朝鮮人2世の立場から，世代が変わると親族関係は希薄になり，会わなくなってしまうのではないか，と親族関係の断絶を危惧する声がある一方，国境を跨いだ親族に会ってみたい，と話す在日朝鮮人3世の若者もいた。自身の親や兄弟，子どもといった血縁関係の近い人びとが国境を跨いで暮らしている，という離散の当事者の数は今後世代の交代と共に減少していくものと考えられるが，それによって親族関係がただ希薄になっていくだけかと言うと，そうではない。次世代を担う若手に親族の記憶が継承され，それによって親族関係が継続される，ないしは再構築される，といった親族のつながりも，今後生まれていくであろう。

本章では，世代を跨ぐ形で継承されていく親族間の記憶について扱った。南北どちらかではなく，国籍に関わらず南北どちらに暮らす親族とも連絡をとり，送金を行っていた祖父の記憶は，国籍に関わらず親族が南北双方にいる，という認識として孫に受け継がれていた。また，世代を超えて受け継がれているのは記憶だけではなかった。言語についても，親族同士がコミュニケーションをとりやすいように，居住国の第一言語に関わらず，親族間で使いやすい言語が日本とDPRKの間でも選択され，結果として日本語がDPRKの中でも継承されていた。国境を跨いだ親族関係は長くは続いて行かないだろうと考える上の世代の人がいる一方で，祖母から国境を跨いで暮らす親族の話を聞いたことで新たに関心を持ち，国境を跨いで暮らす親族に会い，つながっていきたいと考えている若者世代もいた。部分的であれ，次世代に親族の記憶が継承されることで，形は徐々に変わっていく可能性はありつつも，日本とROK，DPRKに跨る親族のつながりは今後も継続していくものと思われる。

Ⅳ　結論

本稿ではここまで，親族が日本とROK，DPRKの3か国に跨って暮らしている人びとの中で，今日何らかの状態で国境を跨いだ親族と連絡をとり得る状態にある人びとが，これまでどのように親族間で連絡をとり，また今後とろうとしているのかについて，親族の移動と記憶に焦点を当てて考察することを目的として論じてきた。

第II章では，日本に暮らす親族が，ROKとDPRKに国境を跨いで暮らす親族とどのように連絡を取ってきたのか，記憶を基に検討した。日本とROK，DPRKの3か国に親族の離散が拡大した要因の一つに「帰国事業」があるが，同事業を通して親族が離別した記憶は，日本で出発を見送った親族と，見送られてDPRKに移動した親族の双方で，当事者同士の記憶として保持されていた。日本で離別した後，しばらくの間は親族が再会することはできない状態にあったが，同期間も手紙を通したやりとりが行われていた。また，80年代を過ぎると，日本に暮らす親族がDPRKを訪問する形で，徐々に親族が再会できるようになっていた。また，親族によっては近年も定期的に日本からDPRKを訪問するなど，互いに連絡をとり合える関係を維持していた。また，国籍によって移動範囲が異なっていた中で，南北双方に暮らす親族のどちらとより会う可能性があるのか，などといった観点から，親族間で国籍の選択が戦略的に行われ，移動できる範囲を確保していた。国境を跨いで暮らす親族と血縁関係が近い親の世代が亡くなることで親族関係が一旦疎遠になってしまった場合でも，何らかの事象によって再会できた場合，過去

の親族の記憶を頼りに，国境を跨いだ親族関係が次世代同士で再構築される，といった事例が生まれていた。

続く第 III 章では，親族間での口承などによって，世代を跨ぐ形で継承されていく親族間の記憶について，南北双方の親族に送金を行っていた祖父を記憶する孫世代，日本に暮らす親族とコミュニケーションをとれるようにするために DPRK で日本語の継承を行う「帰国」した親族，そして国境を跨ぐ親族関係の今後についての世代間における語りを事例として取り上げた。親族との離別を経験した当事者の年齢が徐々に上がっていく中でも，国境を跨いだ親族のつながりを通して，双方がコミュニケーションをとりやすい方法によって，世代を超える形で行われている記憶の継承が確認できた。

ROK に暮らす親族との離別は，在日朝鮮人が日本に渡航した際，ないしは ROK に暮らす親族が日本を離れた際に発生しており，当事者の多くは今日 70 歳代以上となっている。一方，DPRK に暮らす親族との離別については，その多くが「帰国事業」に端を発するものであり，1959 年以降に発生したものである。当事者の年代は今日の 40 歳代以上と，対象となる年齢層が広い。記憶の継承を行っていない，ないしは充分に行えていないことから，国境を跨いだやりとりは今後希薄になっていくと考える親族が一定数いる一方で，その子ども世代，孫世代における関心の持続も起こっており，連絡をとり合う関係を築き得る状況にもある，というのが，今日の日本と朝鮮半島に国境を跨る形で構築されている，親族間のつながりの現状であるといえよう。

日本と ROK，DPRK の 3 か国に跨る親族のつながりについて目が向けられ始めたのは，ごく最近のことである。一方で，日本から DPRK に「帰国」する親族を見送った日本の親族と，今日 DPRK で暮らしている「帰国者 1 世」については徐々に高齢化が進行している。今回が最後の訪問になるのではないか，と考える親族もいる一方で，多くの親族は，コロナ禍によって国境を跨いだ移動を行うことができず，直接会うことができなくなった。コロナ禍による親族関係の変化については，今後の課題としたい。

謝辞

本稿は，JSPS 科研費（特別研究員奨励費 20J23791）の成果の一部である。また，インフォーマントの皆様にはお忙しい中時間を頂戴し，貴重なお話を聞かせていただいた。この場をお借りして心より御礼申し上げます。

注

1）本稿においては，朝鮮半島の南北双方の国家に暮らす人びとを対象とするにあたり，どちらか一方のみを略称，どちらか一方のみを通称とするのではなく，呼称の上でも双方を等しく示したい。（日本語には，大韓民国を指し示す略称として「韓国」があるが，朝鮮民主主義人民共和国を指し示す略称は今日においても存在しないままである。「北朝鮮」は日本政府が用いている通称であり，略称ではない。）よって本稿では，南北の両国家の略称を共に持ち合わせている英語を借用し，大韓民国については ROK（Republic of Korea の略），朝鮮民主主義人民共和国については DPRK（Democratic People's Republic of Korea の略）と表記する。

2）第 187 次帰国船は 1987 年 7 月 25 日に新潟港を出港した（金・高柳　1995：343）。

3）「日本人」の範囲について定義した上で移民について扱った研究に，塩出（2015）がある。塩出は，内地籍を保有していた「大和人」の他，北海道アイヌ，沖縄人，小笠原諸島に暮らす欧米･ハワイ系住民，樺太アイヌにも焦点を当て，日本からアジア太平洋地域へと広範に移動をした日本人移民について検討を加えた。

4）朝鮮人の日本から朝鮮半島への引揚げに関する近年の研究には，宮本（2016），鈴木（2018）がある。

5）例えば日本移民学会編（2018）においても，在日朝鮮人を扱う章では朝鮮半島から日本の内地に渡ってきた事象が取り上げられる一方，「帰国事業」を含む日本から朝鮮半島への移動については検討の埒外に置かれている。

6）筆者は別稿（竹田　2021）において，日朝韓の3か国に親族が跨って暮らしている人びとが，国境を跨いだ親族とどのようにつながり，また親族とのつながりの中でどのような葛藤を抱いているのかを検討した。ここでは，日本を中心としたV字のつながりとして親族関係が構築されており，日本に暮らす人びとが，直接会うことができないROKに暮らす親族とDPRKに暮らす親族の「仲介者」としての役割を果たしていることを明らかにした（竹田　2021：171）。

7）旧満州に関する記憶について記述を試みた佐藤ほか（2020）によれば，戦後社会経済史や政治史の分野での研究が中心とされていた旧満州に関する研究においても，人びとのオーラルヒストリーをはじめとした団体や個人をめぐる私文書や証言を活用した研究が行われるようになったのは，1990年代以降のことである（佐藤ほか　2020：4-9）。

8）この他，木村（2017）は，日本内地における朝鮮人労働者への政策や人びとの意識の変容について検討している。

9）帰国者が滞在することとなっていた赤十字センター（現在の新潟空港がある場所に設置されていた）には，帰国希望者以外は入れなかったことから，他の地域から親族の見送りに向かった人びとは，新潟駅近隣のホテルなどに宿泊していた。

10）離別当時の親族間での認識として，a）日本に暮らす親族も後日DPRKに「帰国」することで一緒に暮らす，ないしはb）帰国者自身と日本に残った親族のどちらか，ないしは双方が両国間を行き来することで会う，といったことが想定されていたが，実際には，日朝間の国境を跨いだ自由な往来は今日まで実現されておらず，DPRKを訪問して親族と対面する場合も，ある程度のまとまった時間とお金，モノが必要となっている（竹田　2021：164-166）。

11）2020年以降はコロナ禍の影響により日本からDPRKへの入国ができなくなったことから，直接会うことは叶っていない。

12）戦時中は「関釜連絡船」と呼ばれる船が下関と釜山の間を行き来しており，これが1970年に再開されたもの。1983年からは毎日運航に増便され，現在まで就航されている。

13）日本からROKに留学中の在日朝鮮人が，共産主義のスパイと見なされ，ROK当局に逮捕・監禁されるという事件も発生した（金　2018）。

14）1981年3月～1988年2月に第6共和国体制となるまで行われた，全斗煥政権のこと。

15）加えてDPRKに親族がいると当局が情報を把握した場合，日本の公安組織からも監視の対象となり得る状況があった。

16）朝鮮半島において親族内で継承されている親族系譜図のこと。族譜に関する研究には嶋（1990）などがある。

17）旧暦の8月15日にあたる中秋節のこと。

18）査証の取得に制限は課されていたものの，渡航はできるようになった。また，韓国籍でもDPRKに親族がいる在日朝鮮人には，DPRK側は査証を発行していた。

19）右派であった李明博政権，ならびに朴槿恵政権下では朝鮮籍保持者は再びROKへの渡航ができなくなった。渡航が再びできるようになったのは，2017年に文在寅政権に変わって以後である。

20）在盛さんの兄妹は日本では朝鮮学校に通った。朝鮮学校では，小学校1年生に相当する初級学校1年

生で，朝鮮語を一から学び始める。このため，朝鮮学校に通った経験を持つ人びとは，得手不得手の差はあれ，第二言語として朝鮮語を解することができるようになる。

21）街を歩いていてたまたまばったり出会う，といった事象以外では，事前申請無しで日本に暮らす親族と DPRK に暮らす親族と会うことは難しい，という状況がある。

参考文献

〈日本語資料（書籍・論文）〉

蘭信三（2008），『日本帝国をめぐる人口移動の国際社会学』，不二出版

蘭信三編（2013），『帝国以後の人の移動―ポストコロニアリズムとグローバリズムの交錯点』，勉誠出版

石田雄（2000），『記憶と忘却の政治学―同化政策・戦争責任・集合的記憶』，明石書店

今泉裕美子・柳沢遊・木村健二編（2016），『日本帝国崩壊期「引揚げ」の比較研究―国際関係と地域の視点から』，日本経済評論社

金孝淳著・石坂浩一監訳（2018），『祖国が棄てた人びと―在日韓国人留学生スパイ事件の記録』，明石書店

木村健二（1989），『在朝日本人の社会史』，未来社

高吉嬉（2001），『「在朝日本人二世」のアイデンティティ形成―旗田巍と朝鮮・日本』，桐書房

佐藤量・菅野智博・湯川真樹江編（2020），『戦後日本の満州記憶』，東方書店

塩出浩之（2015），『越境者の政治史―アジア太平洋における日本人の移民と植民』，名古屋大学出版会

嶋陸奥彦（1990），「族譜―歴史人類学的展望―」，杉山晃一・櫻井哲男編『韓国社会の文化人類学』，弘文堂，39-54

白木沢旭児編（2017），『北東アジアにおける帝国と地域社会』，北海道大学出版会

鈴木久美（2018），『在日朝鮮人の「帰国」政策―1945 ～ 1946 年』，緑蔭書房

杉原達（1998），『越境する民―近代大阪の朝鮮人史研究』，新館社

高橋宗司・朴正鎮編（2005），『帰国運動とは何だったのか―封印された日朝関係史』，平凡社

竹田響（2021），「「仲介者」としての在日コリアン―日本と朝鮮半島に跨る親族の繋がりと葛藤」，『韓国・朝鮮の文化と社会』，風響社，20，141-181

日本移民学会編（2018），『日本人と海外移住―移民の歴史・現状・展望』，明石書店

原尻英樹（1988），『在日朝鮮人の生活世界』，弘文堂

藤原書店編集部編（2005），『歴史のなかの「在日」』，藤原書店

モーリス＝スズキ・テッサ著・田代康子訳（2007），『北朝鮮へのエクソダス』，朝日新聞社

松田利彦・陳姃湲編（2013），『地域社会から見る帝国日本と植民地―朝鮮・台湾・満州』，思文閣出版

宮本正明（2016）「在日朝鮮人の「帰国」―1945 ～ 46 年を中心として」，今泉裕美子・柳沢遊・木村健二編，『日本帝国崩壊期「引揚げ」の比較研究―国際関係と地域の視点から』，日本経済評論社，31-82

山本有造編（2007），『「満州」記憶と歴史』，京都大学学術出版会

米山裕・河原典史（2015），『日本人の国際移動と太平洋世界―日系移民の近現代史―』，文理閣

〈日本語資料（新聞）〉

読売新聞　1959 年 12 月 14 日　夕刊 1 面

〈英語資料〉

Ryang, Sonia.（1997）. *North Koreans in Japan: Language, Ideology, And Identity*, Westview Press.